

セラピー各論2

保育心理士養成講座

稻垣綾子

日本女子大学家政学部児童学科

臨床心理士・公認心理師

内的作業モデル

Internal working model

- 自分が主観的に**不安や危機**を感じたときに応じてくれるのは誰か？
- その人からどの程度、**慰めが期待**できるのか？
- 自分がその人から**援助や保護を受ける価値**があるのか？
…といった「**仮説**」であり、次の行動を導く「**心的な表象モデル**」

◆ アタッチメント対象が存在 ⇒ 慰めや援助を期待できる

- … 自ら助けを求める行動を起こしやすい。
援助の手が差し伸べられた時には援助を受け入れることができる。

◆ アタッチメント対象が不在 ⇒ 誰からの慰めも期待できない

- … 援助を求める行動は起こしにくい。
支援が提供された場合でも無視や拒否に結びつきやすい。

✓ IWMは無意識的・自動的に作用。
私たちの対人関係のあり方に、一貫性と安定性をもたらす

アタッチメントの特徴

“危機的な状況で発動”されるのが基本
「楽しく」でも危機的な状況において利用できない
関係、「体を寄せ合う」ことはできても不安に関して
無関心な関係では、アタッチメントは充足できない

- ① 近接性希求
- ② 分離苦悩
- ③ 安心の基地
- ④ 安全な避難場所

(一緒に過ごすのが好きな人)
(離れていて寂しく感じる人)
(応援してくれていると感じる人)
(落ち込んだときに慰めてくれる人)

- すべてを備えることがアタッチメントの絆 (attachment bond) の形成には必要
- 乳児期は親がすべての特徴を担うが、児童期 (8~14歳) になると、主要なアタッチメント対象は親だが、「近接性希求」「安全な避難場所」の特徴がピア (同輩・友人・恋人) 関係に移行。
- 15~17歳になると、すべての機能がピアに置き換わる
(Hazan & Shaver, 1994; Zeifman & Hazan, 2000; 中尾, 2017)

幼児期はまだまだ “大人” がこの役割を担う

アタッチメント充足の手段

- ◆ 接近・身体接触などの物理的くっつき
- ◆ 抽象能力の高まりにつれ,
言語を介した受容・理解・承認による表象的くっつき



- 児童期前期から準備が開始。初期には子どもの表情や行動から不安を察し、言葉にならない気持ちを表現する手助けをしながら、子どもの問題を一緒に考え、解決する態度が必要。
- ✓ 協同調整 co-regulation (Kerns & Brumariu, 2016)
- 子： 自分の気持ちを的確に把握することが可能。より広い対人関係に必要となる言語化のスキルに。
- ✓ 親や周囲の大人の役割：
子どもの探索行動を支えるための安心の基地の提供がテーマ。
(子どものチャレンジを促進する、自信を与える、など)

ピア・サポートと、仲間関係の発達

“ピア (Peer) ”とは
「仲間・同僚」という意味

“サポート (Support) ”とは
「支援」の意味。「救助」とはちがう

“ピア・サポート”とは
仲間同士で相互に支え合う活動

日本ピア・サポート学会 (2018)
『ピア・サポート・トレーナー養成講座テキスト』

乳児期	<ul style="list-style-type: none">● 他児を注視し、発声・微笑・手伸ばしを組み合わせることによって、他児に働きかける。● 他児からの声かけに対して、その子を見るなどの応答行動がみられる。
幼児期 3歳頃～	<ul style="list-style-type: none">● 一緒に遊ぶ子を「友達」とみなす。● 遊び相手には同性を選ぶ傾向。<ul style="list-style-type: none">➢ 男児同士：より活発的で、粗暴、階層的。➢ 女児同士：より会話が多く、協同。ロールプレイや劇遊びをする。
児童期前期 6・7歳～	<ul style="list-style-type: none">● 仲間関係の重要性が増し、「友だち概念」も変化 “一緒に遊んだり話したり、物をくれたりするなどの活動を共にする人”
児童期後期 9歳～	“困った時にお互いに助け合ったり、苦しい時に励まし合ったりするなどの相互援助をする持続的な関係”
青年期初め 13・14歳～	“お互いのパーソナリティを理解し、お互いに共通のものの見方をもつなどの相互理解の関係”

“たて” の関係から “よこ” の関係へ

- ・ 幼児期の仲間との葛藤・いざこさの原因 (斎藤・木下・朝生, 1986)

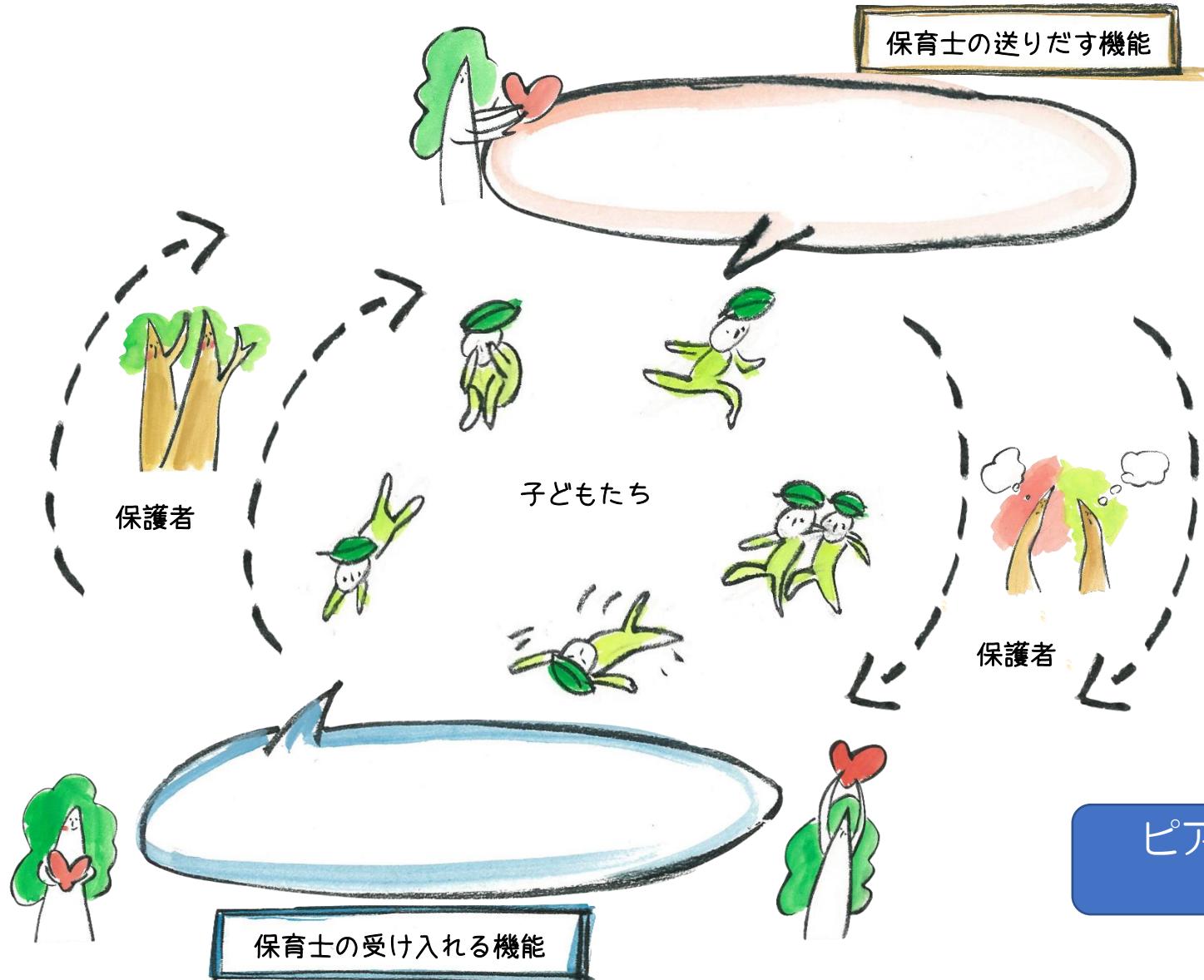
物や場所の占有, 不快な働きかけ, 規則違反,
イメージのずれ, 遊びに関する決定の不一致, 偶発

- ◆ 幼児期の友だち同士の葛藤 (Hartup et al., 1988)

- ・ 友だちではない子との葛藤頻度自体に差はない
 - ・ 友だち同士の葛藤では, **怒りの表出が少ない。**
 - ・ “より公平な解決となる。
- 仲間との葛藤やその仲裁を通じて, 社会スキルを身につけることができ,
仲間関係の形成や維持に役立てている。

幼児期から始まる, ピア関係への移行・発達を,
周囲の大人がいかに支えるか?

4つの“アタッチメントニーズ”に注目して支援を考える



- ①近接性希求
(一緒に過ごすのが好きな人)
- ②分離苦悩
(離れていて寂しく感じる人)
- ③安心の基地
(応援してくれていると感じる人)
- ④安全な避難場所
(落ち込んだときに慰めてくれる人)

ピア関係で解決していくための基盤、移行期を
保育士は、どう支援するか？

《架空事例》

Bくん 5歳年長

「あたまがつらい」

- 3月生まれのB君は、皆より身体も一回り小さく、できないことが多い。集団指導では集中が続かず、多動気味。乳児クラスから在籍しているので、B君が小さいことや幼い部分があることは、子どもたちも、他の保護者もわかつていて、可愛がる意味で、Bの自由な言動を話題にすることが多かった。保護者も、そうした様子を愛らしく感じ、楽しんでいた。
- 年長の夏休み明けから、登園しぶりが始まった。登園時は母にべったり。また、午睡明けに泣きじゃくることが始まった。母親自ら、今の仕事が忙しく、Bに寂しい思いをさせていることが担任との間でも話題に。実際、母が早くにお迎えに行くと、満面の笑みでほっとした様子を見せた。
- 秋の運動会前から、Bは友だちに手を出すようになった。担任は、手でなく言葉で伝えるように指導し、そのことを母にも伝えた。同時期、「家にいたい」と朝パニックが頻発。我慢がきかない。この頃から、Bは家でもあまり友だちの話をすることがなくなった。

- ・運動会当日、年中の男児チームがすれ違いざまに、Bを呼び捨てにして逃げていった。年長クラスでは「くん」を使うので、気になった母がBの気持ちを聞くと「ふつう」。
- ・運動会でのBは、皆と同じようでききず、他の保護者も失笑。演技中、4~5月生まれの男児がBを指導する様子を見て、母は「これでいいのかな」と不安に感じた。
- ・担任からすると、Bのできなさに最初はどうなることかと思ったが、運動会本番にむけて、「Bはだいぶできるようになった。成長した」と。
- ・運動会後も、Bの午睡明けの泣き・暴力・我慢の利かなさが続いた。母がちょうど早めに迎えにいった日は、午睡明けから「寂しい」とずっと泣いていて、おやつも食べられない状態だったとのこと。
- ・その日の夜、母がBに、お昼寝のあとの寂しい気持ちについて聴いたところ、Bは、珍しく30分ほど語ってくれた。

- 「今日は公園にいくとき、列でX君(4月生まれ)たち(男児)が後ろから蹴ってきたんだ。それで仕返しした。ごめんなさい。でも先生は前にいて、いえなかつた」
- 「でもさ、いいこと也有つたんだ。Cちゃんたち(女児)と一緒に虫をつかまえて、家を作つたりしたんだ」
- 「X君はいつもぼくのこと“チビ”って言う。今日も、給食でぼくが好きなブロッコリーとごはんが出たから、ちゃんとお野菜とデザート食べてから、おかわりしにいつたら、そこにX君がいて。“ブロッコリーごはん、できてきてないじやん。あ、チビだからな。できないもん”って言ってさ。食べれなくなつた。…あたまがつらい」。先生にはいろいろおしごとがあつて言えなかつた。
- その前日の朝には、「おかあちゃんのすがたが見えなくて、ぼく、寂しくなつて泣いちゃつたんだ」と最後に伝えて、眠りについたとのこと。

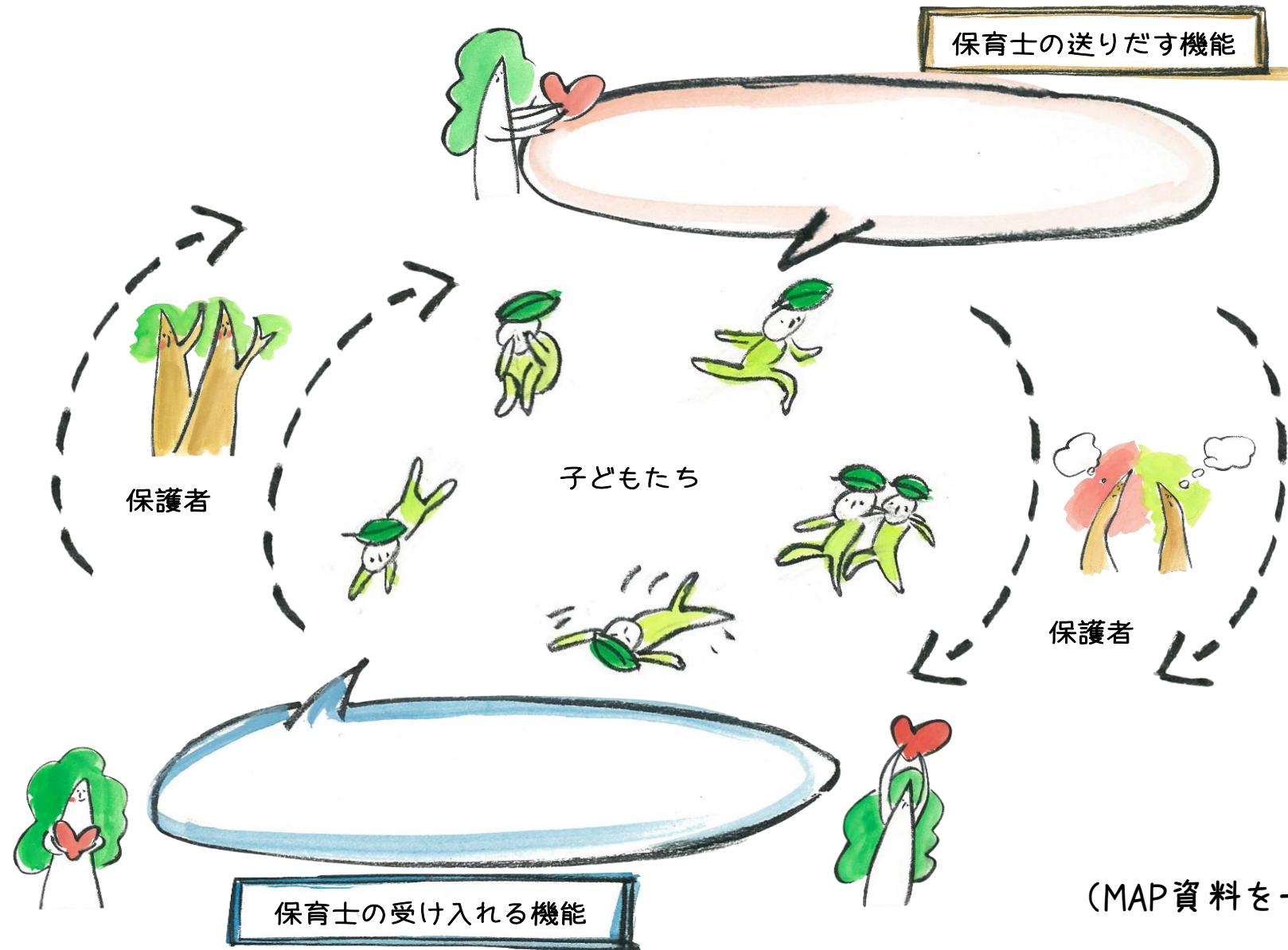
- ・母は涙ながらに担任に報告。

「できないことが多いのは仕方ないと思ってきたけれど、こんなに本人を苦しめていたとは思わなかった。B, 本当に心細くなって、午睡明け、母親の姿がみえなくて、シクシクしてたのかな…」

B君と母には、どのようなアタッチメントニーズがあり、保育士としてはどのような対応が考えられるでしょうか？

アタッチメントやピア関係の支援を念頭において、小グループでディスカッションしてみましょう

ピア関係で解決していくための基盤の支援



文献

- 平林秀美 (2021) 社会性の生涯発達. In 改訂版 発達心理学特論 荻野美佐子編著 放送大学教育振興会.
- 北島歩美 2021 アタッチメントの発達と家族 In 児童虐待における公認心理師の活動. 金剛出版.
- 中尾達馬 2017 児童期から成人期のアタッチメント, In アタッチメントに基づく評価と支援, 北川恵・工藤晋平編, 誠信書房.
- 澤田涼 2021 『ピア・サポート研修』. 帝京大学心理学科・稻垣ゼミ外部講師による講演資料.